

# 本阿弥光悦「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の比率分割

The proportional partitioning of Honami Koetsu's Calligraphy of Poems of the 36 Immortal Poets over Painting of Cranes

財前 謙  
根本 知

Ken Zaizen & Satoshi Nemoto

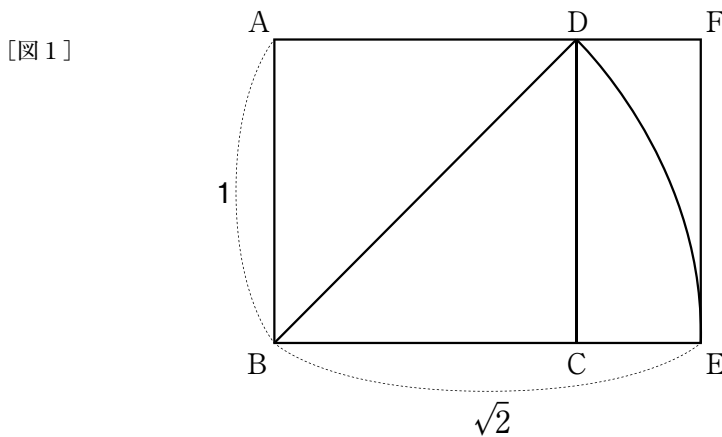
本稿は本阿弥光悦「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」を比率分割によって解析し、その結果を報告するものである。

## 1、ルート ( $\sqrt{\quad}$ ) 矩形と黄金矩形の基本的な考え方

### (1) ルート ( $\sqrt{\quad}$ ) 矩形について

ルート矩形と黄金矩形の基本は正方形にある。ルートとは対角線と考えればよい。

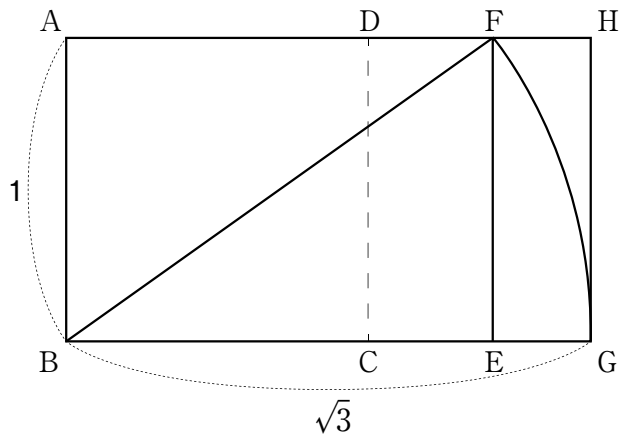
[図1] において、正方形ABCDの対角線BDと同じ長さをBCの延長線上にとり、これをEとする。このとき長方形ABEFを $\sqrt{2}$ 矩形という。AB : BE = 1 :  $\sqrt{2}$  (1.414...)。



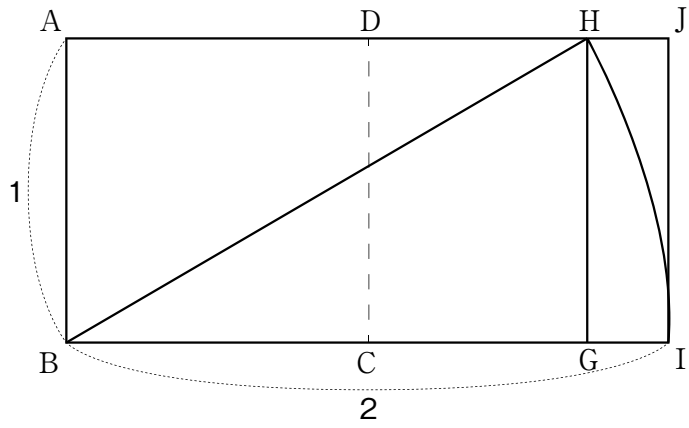
[図2] において、 $\sqrt{2}$ 矩形ABEFの対角線BFと同じ長さをBEの延長線上にとり、これをGとする。このとき長方形ABGHを $\sqrt{3}$ 矩形という。AB : BG = 1 :  $\sqrt{3}$  (1.732...)。

[図3] において、 $\sqrt{3}$ 矩形ABGHの対角線BHと同じ長さをBGの延長線上にとり、これをIとする。このとき長方形ABIJを $\sqrt{4}$ 矩形という。AB : BI = 1 :  $\sqrt{4}$ 。  $\sqrt{4} = 2$ 。つまり長方形ABIJは、正方形ABCDを横に2つ並べたものになる。

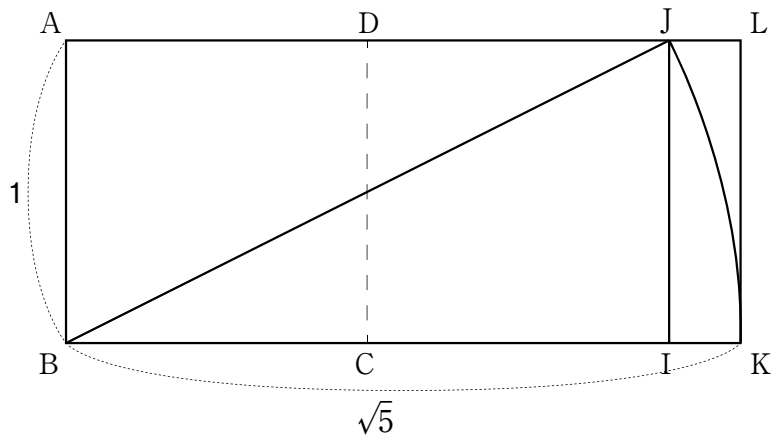
[图2]



[图3]



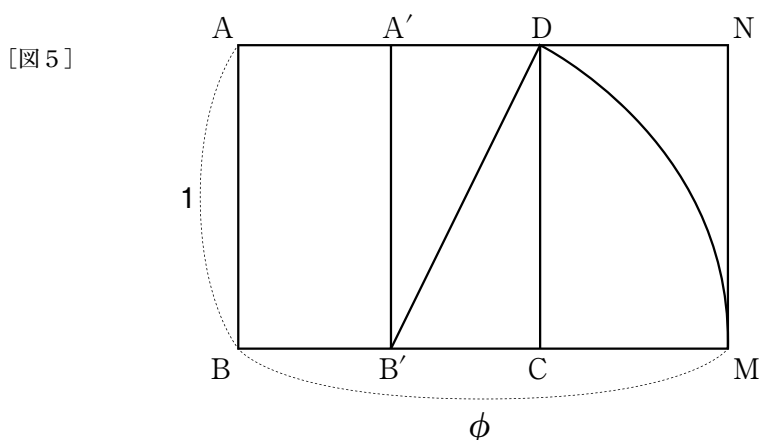
[图4]



[図4]において、 $\sqrt{4}$  矩形ABIJの対角線BJと同じ長さをBIの延長線上にとり、これをKとする。このとき長方形ABKLを $\sqrt{5}$  矩形という。AB : BK = 1 :  $\sqrt{5}$  (2.236...)。  
同様の作業を繰り返すことによって、順次  $\sqrt{6}$  矩形、 $\sqrt{7}$  矩形...が得られる。

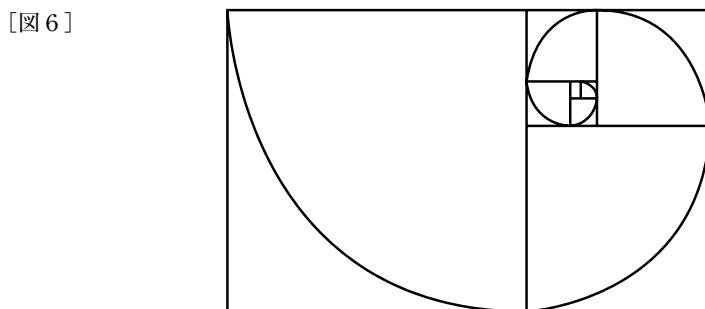
## (2) 黄金矩形について

さてこれとは別に、[図5]において正方形ABCDのADおよびBCの $\frac{1}{2}$ をそれぞれA'、B'とし、長方形A'B'CDの対角線B'Dと同じ長さをB'Cの延長線上にとり、これをMとする。



このときAB : BM = 1 :  $\phi$  (1.618...)となる。そして長方形ABMNを $\phi$  矩形とよぶ。ギリシャ文字 $\phi$  (プフィ) = 1.618...は黄金比、または黄金率とよばれ、 $\phi$  矩形は黄金矩形ともよばれる。

また [図6] のように、 $\phi$  矩形から短辺を一辺とする正方形をとると、残りの部分はまた $\phi$  矩形となり、この作業をくり返していっても必ず $\phi$  矩形が残る。



さらにそのそれぞれの正方形の一辺の長さをもって¼円を描いてゆくと、螺旋状の渦巻きが得られる。

$\phi = 1.618\dots$ の近似値を整数比で示すと、

$0 : 1 \doteq 1 : 2 \doteq 2 : 3 \doteq 3 : 5 \doteq 5 : 8 \doteq 8 : 13 \doteq 13 : 21 \doteq 21 : 34 \doteq 34 : 55 \doteq 55 : 89 \doteq 89 : 144 \doteq 144 : 233 \doteq 233 : 377\dots$ となる。

$$0 + 1 = 1$$

↓ ↓

$$1 + 1 = 2$$

↓ ↓

$$1 + 2 = 3$$

↓ ↓

$$2 + 3 = 5$$

↓ ↓

$$3 + 5 = 8$$

↓ ↓

$$5 + 8 = 13$$

↓ ↓

$$8 + 13 = 21$$

↓ ↓

$$13 + 21 = 34$$

↓ ↓

$$21 + 34 = 55$$

↓ ↓

$$34 + 55 = 89$$

↓ ↓

$$55 + 89 = 144$$

↓ ↓

$$89 + 144 = 233$$

↓ ↓

$$144 + 233 = 377\dots$$

近似値とはいえ、 $[0 : 1 = 1]$  や  $[1 : 2 = 2]$  では  $\phi$  (1.618...) には遠く、数字が大きくなってゆくにしたがって  $\phi$  (1.618...) との差は縮まってはゆくが、それは計算式上のことであって、実際人間の感覚だけで捉えやすいのは  $2 : 3 \approx 3 : 5 \approx 5 : 8$  あたりである。そのため、黄金比は2、3、5、8の整数比で捉えることが多い。特に  $3 : 5$ 、ないしは  $5 : 8$  の比率が実用の黄金比として活用されてきた。

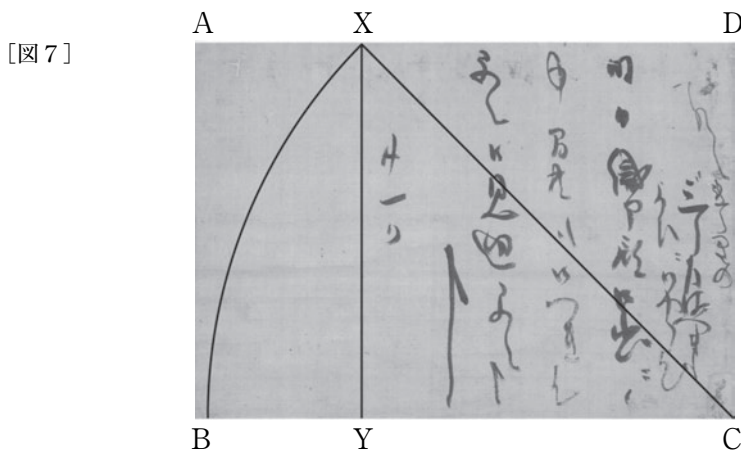
## 2、本阿弥光悦と比率

次に、本阿弥光悦の制作が比率計算を基盤としていたことの証例として、書状2点と「法華経箱」、「四季草花下絵古今集和歌巻」をとりあげる。

### (1) 光悦書状の比率

#### a、書状 (□□宗宛)

(28.5m×41.0cm、個人蔵、サントリー美術館「光悦と宗達」展 (1999年) 図録より転載)



[図7] において、 $AB$  ( $CD$ ) :  $AD$  ( $BC$ ) =  $1 : \sqrt{2}$

$CD$ を一辺とする正方形を $XYCD$ とすると、書状の揮毫部分はこの正方形の中に収まり、その残りの $ABYX$ が余白として残る。

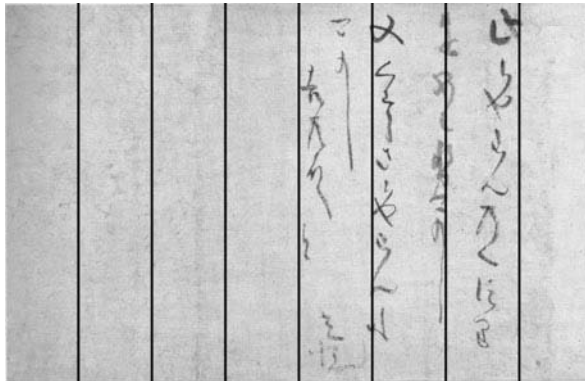
註) 実際のところの寸法は、表装時に多少の切截があったことが考えられる。したがって [図7]

$B$ のわずかなズレについては誤差の範囲として判断する。

## b、書状（吉左殿宛）

（27.7cm×43.0cm、楽美術館蔵、サントリー美術館「光悦と宗達」展（1999年）図録より転載）

〔図8〕

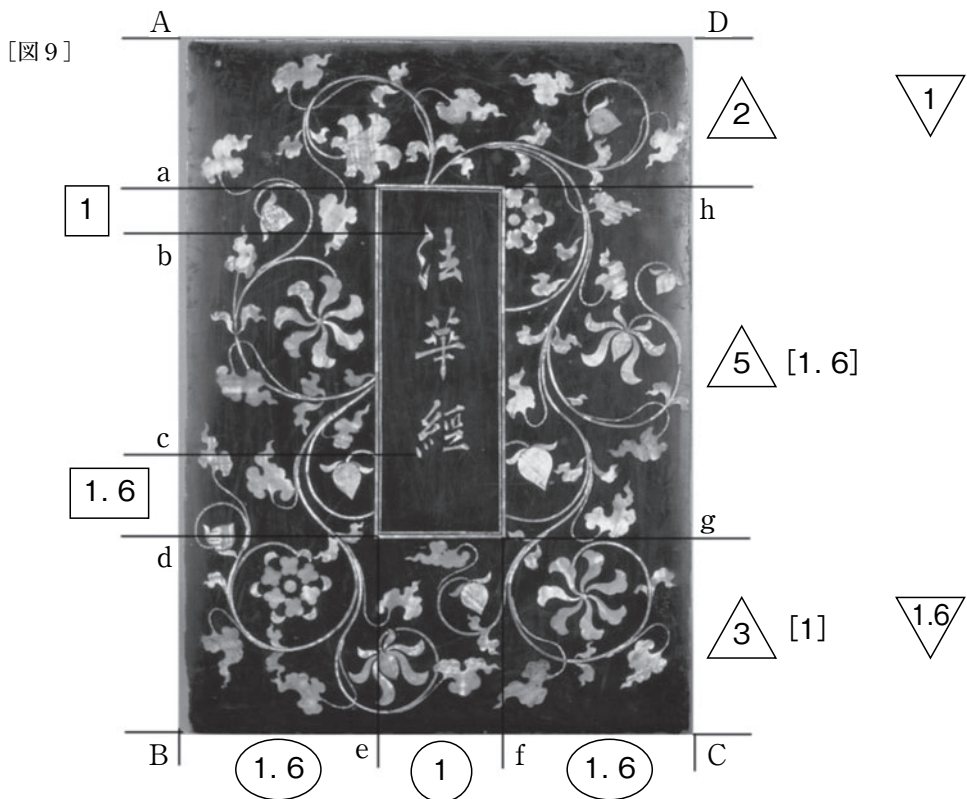


これもまた大胆な散らしの書状だが、揮毫部分が本紙全体の $\frac{3}{8}$ 、余白が $\frac{5}{8}$ を占める。これは<sup>やつわり</sup>八割といわれる手法で、実際は紙を縦折りに3回繰り返す（三つ折り）ことで、本紙が八分割され、そのうちの3分割部分に用件を揮毫したものと推測される。これにより、〈揮毫部分〉：〈余白部分〉 = 3 : 5 = 1 : 1.666…となる。1.666…は $\phi$ （1.618…）の近似値で、視覚上実際では小数点第2位以下の誤差は問題にならない。その結果、〈余白4〉：〈揮毫3〉：〈余白1〉 → 〈揮毫3〉：〈余白5〉の黄金比による構成が生まれる。

a、書状（□□宗宛）においても、実際は三つ折りにした上で、5 : 3の比率分割を行い、揮毫部分と余白を構成した可能性が大きい。いずれにしても、書状を認める光悦の脳裏に比率分割のまなざしがあったことが十分推測できる。

## （2）「法華経箱」（「花唐草文螺鈿経箱」）の題簽比率

（縦32.8×横28.5×高さ12.5cm、本法寺蔵、サントリー美術館「光悦と宗達」展（1999年）図録より転載）



註) □、○、△、▽、[ ] の記号とその中の数字は、同記号内における各々の比率を示す。ここの1.6とは $\phi$ の近似値の意味として使用している。

[図9] において、

$AD = Ad = dg = gD$  ( $AdgD$ は正方形)

で、 $ABCD$ はほぼ $\sqrt{2}$ 矩形の箱である。

$Be : ef : fC = \phi (1.618\cdots) : 1 : \phi (1.618\cdots)$

$Dh : hg : gC = 2 : 5 : 3$

よって、

$Dh : gC = 2 : 3 \doteq 1 : \phi (1.618\cdots)$

$gC : hg = 3 : 5 \doteq 1 : \phi (1.618\cdots)$

となる。

また、題簽中の上下の余白についても、

$$ab : cd = 1 : \phi \quad (1.618\dots)$$

となっている。

このように「法華経箱」の題簽は黄金比を駆使した分割によって構成されている。本阿弥光悦において、比率分割が制作上の設計基準であったことはここでも十分納得されるであろう。なお、花唐草文の曲線も黄金分割による解析が可能（前章の螺旋状の渦巻き参照）だが、ここではこれについては省略する。

### （3）「四季草花下絵古今集和歌巻」の比率分割

「四季草花下絵古今集和歌巻」は、俵屋宗達の描いた下絵料紙（33.7cm×918.7cm）に、本阿弥光悦が古今集より19首を揮毫した和歌巻で、現在は畠山記念館に所蔵され、国の重要文化財に指定されている。

分割の基準となるのは卷子の天地、縦寸（33.7cm）である。ここでも実際のところは表装時に幾分か切截も考えられるが、宗達の描いた四季草花下絵の段階ですでに卷子本紙の寸法はほぼ確定していたと考えられるので、縦寸（33.7cm）をもって基準とする。

本作を揮毫するにあたっては、縦寸（33.7cm）を基準とした $\sqrt{2}$ 矩形と、正方形をもって和歌揮毫のために分割したと考えられる。実際には、縦寸（33.7cm）を基準とする $\sqrt{2}$ 矩形（33.7cm×54.5cm）、および正方形（33.7cm×33.7cm）2種類の型紙が準備され、これによって卷子紙面に和歌1首分の分割が行われたと考えるのが妥当だろう。

序盤5首目までは $\sqrt{2}$ 矩形の中に揮毫してゆき、その後、正方形の中に一首を収めるところが出てくる。最終19首目の和歌の揮毫は正方形の中に収めてあるが、印も含めれば $\sqrt{2}$ 矩形である。これについては、 $\sqrt{2}$ 矩形をとった後で、さらに右辺をそろえて正方形をとり、それに準じて和歌を揮毫し、落款印を捺したと推測される。

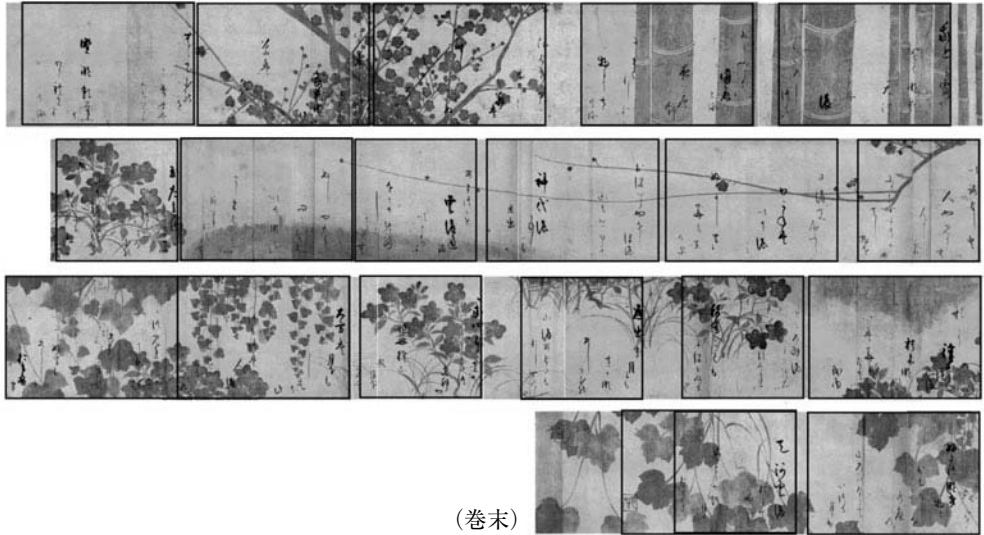
次に分割方法を示した全体像〔図10〕を掲載する。

（畠山記念館「與衆愛玩 琳派」展（2007年）図録所収のものをもとに、 $\sqrt{2}$ 矩形と正方形を布置した）



[図10]

(巻首)



(巻末)

以上のことから、和歌巻の揮毫制作においても、本阿弥光悦が比率による分割法を活用していたことを納得するはずである。

### 3、「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の比率分割

以上1、2の前提をもとに、本題である「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の比例分割を解析する。

「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」は、俵屋宗達の描いた鶴下絵料紙（縦34.0cm×横1356.7cm）に、本阿弥光悦が三十六歌仙から各一首ずつ36首を揮毫した卷子本で、現在は京都国立博物館に所蔵され、国の重要文化財に指定されている。本章ではこの「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の光悦が揮毫した36首について、各首の揮毫スペースの比率分割の解析結果を報告する。

分割の基準となるのは、卷子の天地、縦寸（34cm）である。「四季草花下絵古今集和歌巻」同様に、実際のところは表装時に幾分かの切截も考えられるが、宗達の描いた鶴下絵の段階ですでに卷子本紙の寸法はほぼ確定していたと考えられるので、縦寸（34cm）をもって基準とする。

「四季草花下絵古今集和歌巻」が2種類の矩形をもって分割していたのとは異なり、「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」では縦寸（34cm）を基準にした場合、9種類の矩形が解析された。おそらく本阿弥光悦は「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」を揮毫するにあたって、次の9種類の型紙

を準備し、鶴下絵料紙を分割した上で揮毫したとみられる。

- 1、正方形→34cm×34cm
- 2、 $\sqrt{2}$  矩形→34cm×48cm
- 3、 $\sqrt{3}$  矩形→34cm×58.8cm
- 4、 $\sqrt{4}$  矩形→34cm×68cm
- 5、 $\sqrt{5}$  矩形→34cm×76cm
- 6、 $\sqrt{6}$  矩形→34cm×83.2cm
- 7、 $\sqrt{7}$  矩形→34cm×89.9cm
- 8、 $\phi$  矩形→34cm×55cm
- 9、和歌巻の縦寸を長辺とする  $\phi$  矩形→34cm×21cm ( $\phi'$  矩形と表記)

なお、矩形 $\frac{1}{2}$ の分割は、型紙が和紙であればこれを折ることで容易になされたものと推測できる。

以上、9種類の矩形型紙による鶴下絵三十六歌仙和歌巻の分割の全貌は、次の一覧表と[図11]のとおりである。

([図11]は朝日新聞社、国華社編『光悦書宗達金銀泥絵』(1978年)から転写し、そこにそれぞれの矩形を布置した)

#### 【鶴下絵三十六歌仙和歌巻の分割】

	分割された矩形の種類	歌人名	揮 毫 和 歌	備考
①	$\phi$ 矩形	柿本人丸	ほの、と明石の浦の朝霧にしまかくれ行ふねをしそ思ふ	
②	$\sqrt{2}$ 矩形	凡河内躬恒	いつくとも春のひかりはわかなくにまたみよし野の山は雪ふる	
③	$\phi$ 矩形	中納言家持	かさ、きのわたせるはしにをく霜のしるきをみれは夜そ更にける	
④	$\sqrt{4}$ (= 2) 矩形	在原業平	つきやあらぬはるやむかしの春ならぬ我身ひとつはものみにして	
⑤	$\sqrt{5}$ 矩形	猿丸大夫	をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふことりかな	
⑥	$\sqrt{2}$ 矩形	素性法師	今来むといひしはかりになかつきの有明月を待出つる哉	
⑦	$\sqrt{5}$ 矩形× $\frac{1}{2}$	中納言兼輔	みかのはらわきて流る、いつみかはいつみきとてかこひしかるらむ	
⑧	正方形	中納言敦忠	身にし見思心のとしふれは終に色にも出ぬへきかな	
⑨	$\sqrt{5}$ 矩形－正方形	源公忠朝臣	行やらて山路暮しつほと、きす今一聲のきかまほしさに	※ 1
⑩	$\sqrt{3}$ 矩形－正方形	徽子女王	ぬる夢にうつ、のうさもわすられておもひなくさむほとそはかなき	※ 2 ※ 3
⑪	正方形	藤原敏行朝臣	秋来ぬと目にはさやかにみえね共風のとにぞ驚かれぬる	

⑫	正方形	源宗于朝臣	常盤なる松のみとりも春くれはいまひとしほの色まさりけり	
⑬	正方形	藤原清正	ねのひしにしめつる野辺のひめこまつひかてや千世の陰をまたまし	
⑭	正方形	藤原興風	誰をかもしる人にせむ高砂のまつもむかしの友ならなくに	
⑮	正方形	坂上是則	三芳野の山のしら雪つもるらし旧里寒く成まさる也	
⑯	$\sqrt{3}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	三条院女藏人	いは、しのよのちきりはたえぬへしあくるわひしき葛城の神	
⑰	$\phi'$ 矩形	大中臣能宣	みかきもり衛士の焼火のよるはもえ昼はきえつ、物をこそおもへ	※ 4
⑱	正方形	平兼盛	暮て行秋の形見にをくものは我もとゆひのしもにそ有ける	※ 5
⑲	$\phi$ 矩形	紀貫之	しら露も時雨もいたくもる山はした葉のこらす色つきにけり	※ 4
⑳	正方形	伊勢	三輪の山如何に待見むとしふともたつぬる人もあらしとおもへは	
㉑	正方形	山辺赤人	あすからは若葉つまむとしめし野に昨日も今日も雪はふりつ、	
㉒	$\sqrt{5}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	僧正遍昭	すゑの露もとのしつくや世中のをくれさきたつためし成らむ	
㉓	$\sqrt{5}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	紀友則	東路のさやのなか山なか、に何しか人をおもひそめぬ	
㉔	$\phi'$ 矩形	小野小町	色見えてうつろふものは世中の人の心の華にそ有ける	※ 4
㉕	$\sqrt{2}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	中納言朝忠	万代の始と今日をいのりをきて今行末は神そかそへむ	
㉖	$\sqrt{2}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	藤原高光	かくはかりへかたく見ゆる世中に浦山しくもすめる月かな	$㉕ + ㉖ = \sqrt{2}$ 矩形
㉗	$\sqrt{3}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	壬生忠峯	はるたつといふはかりにやみよし野の山もかすみてけさはみゆらむ	
㉘	$\sqrt{3}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	大中臣頼基	ひとふしに千代をこめたるつえなればつくとも尽し君かよはひは	$㉗ + ㉘ = \sqrt{3}$ 矩形
㉙	$\sqrt{3}$ 矩形 $-\sqrt{6} \times \frac{1}{2}$	源重之	つくは山葉山しけ山しけ、れとおもひ人にはさはらさりけり	※ 6
㉚		源信明朝臣	あたら夜の月と華とをおなしくは哀しかれらむ人に見せはや	
㉛	$\sqrt{2}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	源順	水の面に照月なみをかそふれは今夜そ秋のものなか成ける	
㉜	$\sqrt{2}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	清原元輔	ちきりきなかたみに袖をしほりつ、すゑの松山波こさしとは	$㉛ + ㉜ = \sqrt{2}$ 矩形 $㉜ + ㉝ = \sqrt{2}$ 矩形
㉝	$\sqrt{2}$ 矩形 $\times \frac{1}{2}$	藤原元真	荒玉の年を送てふる雪にはるとも見えぬけふの空哉	
㉞	$\sqrt{3}$ 矩形	藤原仲文	有明のつきのひかりを待ほとにわかよのいたくふけにける哉	
㉟	$\sqrt{7}$ 矩形	壬生忠見	焼す共草はもえなむ春日野を但はるの日にまかせたら南	
㊱	$\sqrt{5}$ 矩形	中務	秋かせの吹につけても問ぬかなおきの葉ならはをとはしてまし	(印を含めれば $\sqrt{6}$ 矩形)

※ 1、右前⑦「中納言兼輔」と⑧「中納言敦忠」の境界線を右辺とする $\sqrt{5}$  矩形をとり、そこから⑧「中納言敦忠」の正方形分を除いた部分。

※ 2、 $\sqrt{3}$  矩形をとり、左辺から正方形をとった残り部分。

※ 3、「わするゝ」→「なくさむ」に訂正。

※ 4、和歌巻の縦幅を長辺とする黄金矩形。

※ 5、「秋の涙」の「涙」をミセケチして「秋の形見に」に訂正。

※ 6、「書き入れ 2 首」㉗「壬生忠峯」と㉘「大中臣頼基」の $\sqrt{3}$  矩形右辺から $\sqrt{6}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$  をとった残りの部分の余白に 2 首揮毫。

[图11]

(卷首)



②  $\sqrt{2}$  矩形



①  $\phi$  矩形



④  $\sqrt{4}$  矩形



③  $\phi$  矩形



⑤  $\sqrt{5}$  矩形



⑧ 正方形



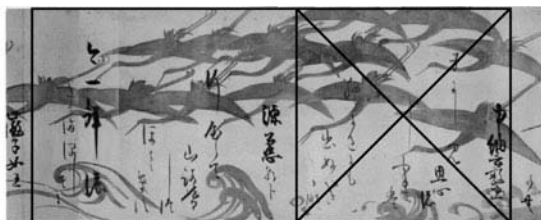
⑦  $\sqrt{5}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



⑥  $\sqrt{2}$  矩形



⑪ 正方形



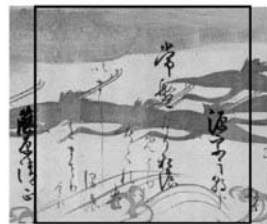
⑨  $\sqrt{5}$  矩形—正方形



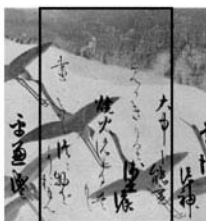
⑭ 正方形



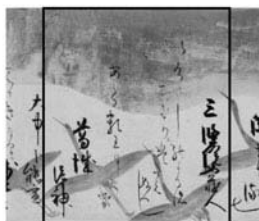
⑬ 正方形



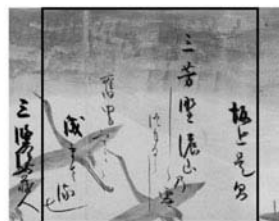
⑫ 正方形



⑰  $\phi'$  矩形



⑯  $\sqrt{3}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



⑮ 正方形



⑳ 正方形



⑱  $\phi'$  矩形



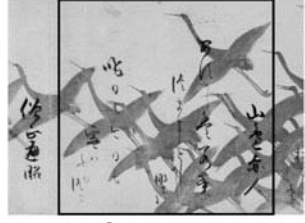
⑱ 正方形



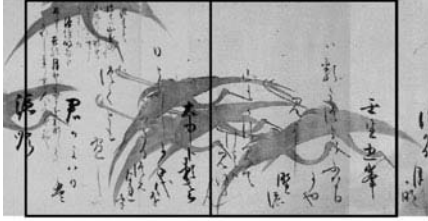
23  $\sqrt{5}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



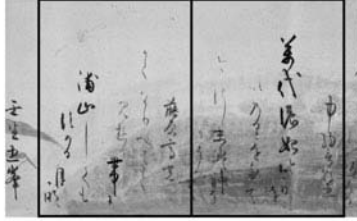
22  $\sqrt{5}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



21 正方形



28  $\sqrt{3}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



27  $\sqrt{3}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



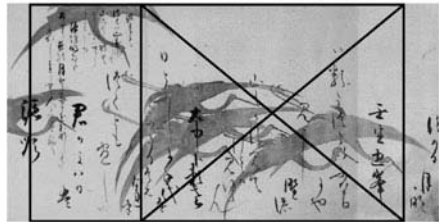
24  $\phi'$  矩形



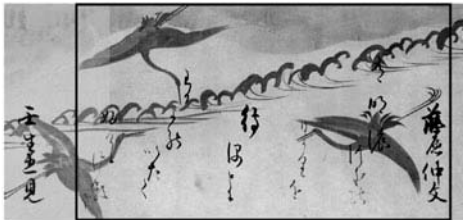
32  $\sqrt{2}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



31  $\sqrt{2}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



29/30  $\sqrt{3}$  矩形 -  $\sqrt{6}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



34  $\sqrt{3}$  矩形



33  $\sqrt{2}$  矩形  $\times \frac{1}{2}$



③⑤  $\sqrt{7}$  矩形



(巻末) ③⑥  $\sqrt{5}$  矩形 (印を含めれば $\sqrt{6}$  矩形)

#### 4、おわりに

本稿で扱った光悦作品はいずれも博物館等の所蔵のため実測はかなわず、図録等による検証および本稿図版においては自ら微妙な誤差のおこりうることは了とされたい。なおこの比率分割法は光悦の茶碗にも見出されるが、ここでこれを使用していないのは立体物の写真ではなおさらその誤差が生じるためである。

ところで、②⑨源重之および③⑩源信明朝臣における和歌の書き入れについては、これを含めて光悦の散らし書きがことごとく $\sqrt{7}$  矩形に当てはまること、さらにその揮毫部分も比率分割で解析可能なこと、巻末にはまだ二首を追加するのに必要な余白はないわけでもなく、最終盤では $\sqrt{7}$  矩形や $\sqrt{5}$  矩形 (印を含めば $\sqrt{6}$  矩形) を用いていて、もし途中で揮毫漏れに気づいていたらこのようなことはなかっただろうし、ここまで計算しつくされた制作で、安易な揮毫漏れは、かえって不自然ともいえる。ここから鑑みると、あえて揮毫漏れを装った作為だったとも考えられる。完璧な計算式の分割の中に、書とそれを書く人間のもつ情緒的要素 (書き漏れや脱字等の訂正) を光悦が敢えて取り入れたとも推測される。

また「四季草花下絵古今集和歌巻」が $\sqrt{2}$  矩形と正方形のみの分割法にとどまっているのに対して、「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の制作では複雑きわまる分割法を導入している。このことから「四季草花古今集和歌巻」と「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の製作年代には、それ

相応の時間的経過が推測される。書状やその他製作年代の明らかな筆跡との比較検討により、今後「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の製作年代の推定も可能となってくるであろう。

さらに、矩形の種類、歌人の順序や揮毫和歌の選択、そして何より鶴下絵との関連から、「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」の主題や制作動機などを、今後解き明かしていくことになるかもしれない。

加えて、光悦がギリシャ以来、西洋美術に滔々と伝わる比率分割法をどのようにして入手したのか、その興味は尽きない。キリスト教の伝来以来、京都には多くの宣教師が滞在していたことを考えると、この方面と光悦の関わり方の記録はないのか気にかかる。あるいは阿弥号をもつ同朋衆としての家系を考えるなら、紙に残らぬ一子相伝の何かがあったかもしれないが、これらはすべて今後の課題として示しておくにとどめる。

〈付記〉

光悦書状の特異な余白に八割<sup>やつわり</sup>の黄金比をみいだしてより、「法華経箱」や茶碗など本阿弥光悦の制作に比率分割が大きく関与していることはやくから認知していたが、「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」については複雑で、いまひとつ分からないまま長い年月が過ぎた。このたびそれが様々な比率を駆使し尽くした結果であることを納得できたことはまことに喜ばしい。これがなかったのはひとえに、本阿弥光悦の書跡研究ですでに博士号を得ている根本知が光悦研究史全般を見通しながら度重なる検証に付き合ってくれたからに他ならない。「四季草花下絵古今集和歌巻」の比率分割は、本論を補強するために彼が自力で解析したものである。一年以上に及ぶくりかえしの検証と協議を経て本稿は形をなし、論文としての最終仕上げの作業は根本が担った。今後この若き研究者によって光悦研究がさらに進むことを期待しながら、本稿共同執筆の所以を記しておく。(財前)

本阿弥光悦に関するあらゆる文献に目を通し、古筆や故実の素養と光悦の関係をこれまで明らかにしてきましたが、その継承を発展につなげた光悦の芸術性についてはあと一步、実証には至っていませんでした。その後、財前先生から光悦と比率分割の関係を聞かされたときは、驚愕とともに、その慧眼に嫉妬心さえおぼえるものがありました。しかし鑑賞者の多くが書の知識なくしてもその美しさに魅了されてしまう理由について、その答えがここにあるようにも思われます。この視点は光悦研究において未だかつてなかったことであり、書跡研究の方法論としても革新的です。この度、本稿を共同執筆というかたちで世に送り出せることに感謝いたします。(根本)